



患者掘り起こしのため水俣病多発地区で行なわれた住民検診

新しい水俣病問題を聞いたのは、水俣市月浦、病院看護人川本和子氏直さなければならぬと、川本さんは「水俣病の全体像を変えなければ、隠れて苦しんでいる未認定患者は数えない。重篤患者を通じて見る水俣病ではなく、汚染の実態を完全暴露せよ」と訴求し、それを引き継いだ

水俣病の公害認定から二十六日で三周年を迎えた。認定当時百十一人だった患者数は、その後百三十四人にふえた。特にこの一年は、未認定患者の「掘り起こし」が水俣病問題の中心となり、これまでの認定患者からは想像されない、新しい水俣病像が目が向けられた。その意味からは認定当時より一歩進んで新しい段階を迎えなければ、三年にしてやっと水俣病の核心に迫る手がかりがつかめたというのが現状。

公害認定から三周年

やっと核心に手掛り 患者の掘り起こし、続く

「掘り起こし」の熱決を遂げ、これを並行して審査は四月新しく十三人の患者を認定。水俣市民会議、県民会議、告発する会などの支援団体が審査会の駆逐を迫り、未認定患者の掘り努力を重ねている。

一方、住民の間でも疑わしいものはこの際申請しようとの動きが目立ち、すでにチツソとの間に補償問題を解決している処理委任派の間からも申請者が相次ぎ、二十五日現在で百三十一人というか

つけない大騒動になった。このなかには天草郡御所浦町三人、出水市福之江地区二人など、これまで認定患者のない地区からの申請も含まれており、水俣病の汚染の広がりを物語っている。

熊大第一水俣病研究会は八月、有機水銀汚染地区とみられる天草郡御所浦町と、多発地区の水俣市で住民検診を実施。また鹿児島県でも「隠れ水俣病」のモデルケースともみられていた出水地方で、一斉検診をするに至っている。また熊本県でも不知火漁沿岸の一斉検診も具体化させる。これらはいずれも水俣病の全体像をつかむ方向に沿った動きで、公害認定三年にして、水俣病の「前線」

た。
三周年、日の二十六日は、午後

三時から患者や支援団体の水俣病市民会議、水俣を告発する会百人が、熊本市内をデモ行進して、これからの水俣病問題「をアベール、午後六時からは県福祉会館で、支援団体による記念集会も開き、水俣病闘争」の経過と展望を報告する。